学 位 論 文 の 要 旨

氏 名　小岡 亜希子

学 位 論 文 名

介護医療院における重度要介護高齢者に対する「快適な排便ケア」の実態と
それに影響を及ぼす要因との関連検証

論 文 内 容 の 要 旨

【研究背景】

長期療養を必要とする重度要介護高齢者に対する排便ケアは、複雑で多様な疾患を持ち合わせている背景と、自ら便意を訴えたり排泄行動をとったりすることが困難な状況から、これまで下剤にのみに頼った排便管理が行なわれてきた現状がある。今後は、介護医療院において重度要介護高齢者に対する「快適な排便ケア」の実践が必要不可欠なものであり、その実態とケア改善のための要因を探ることが必要である。

【研究目的】

介護医療院における重度要介護者に対する看護師の快適な排便ケアの実態を明らかにし、排便ケアの実践に影響する要因との関連性を明らかにする。

【研究方法】

研究方法は、自記式質問紙調査による関連検証研究デザインである。

本研究の概念枠組みは、重度要介護高齢者に対する快適な排便ケアの実践は、施設の属性に関する要因、看護師個人の属性に関する要因、組織環境に関する要因、看護師の排便ケアに対する信念、看護師の生活を支える看護の態度、看護師の排便および排便ケアに関する知識の 6 つの要因から影響を受けると予測するものである。目的変数は、独自に作成した重度要介護高齢者に対する快適な排便ケア実践で計 51 項目からなる。

研究の対象者は、全国の介護医療院　570 施設のうち研究協力の得られた施設に勤務している看護師・准看護師とした。

分析方法は、重度要介護高齢者に対する快適な排便ケアの実践項目について、項目分析、探索的因子分析を行い、重回帰分析（強制投入法）をおこなった。

研究実施にあたって、島根大学医学部看護研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

対象となる 570 施設のうち、60 施設、405 部を有効回答とした。

重度要介護高齢者に対する快適な排便ケアの実態については、アセスメントに基づく排便ケアの平均得点は 2.68±0.43 点、苦痛と羞恥心に配慮したケアの平均得点は 3.17±0.41 点、チームアプローチの平均得点は 2.76±0.54 点であった。

介護医療院における重度要介護高齢者に対する看護師の快適な排便ケアは、探索的因子分析の結果、【第1因子：疾患や内服薬の副作用にともなう排便の不快を考慮するケア（α＝.839)】【第2因子：日常生活上のもてる力を活かすケア（α＝.758)】【第3因子：便の生成や移送を援助するケア（α＝.754)】【第4因子：腸内環境を整えるケア（α＝.698)】の4因子が抽出された。

第1因子は、要介護4・5の高齢者の割合が高い（β＝.112, p＝.029)、院内の排泄ケア勉強会へ参加している（β＝.112, p＝.042)、院外の排泄ケア勉強会へ参加している（β＝.098, p＝.026)、排便管理の看護計画を立案している（β＝.104, p＝.025)、排泄に関する助言者の有無（β＝.122, p＝.008)、コントロール感得点が高い(β＝.151, p＝.017)、学習雰囲気得点が高い(β＝.168, p＝.005)、生活の視点を取り入れた看護の態度がある（β＝.144, p＝.021)、排便ケアに関する知識得点が高い（β＝.111, p＝.012）に関連がみられ、調整済みR^2値は.449であった。

第2因子は、皮膚排泄ケア看護認定看護師がいる（β＝.207, p＝.001)、院内の排泄ケア勉強会へ参加している（β＝.142, p＝.019)、コントロール感得点が高い（β＝.191, p＝.006)、生活の視点を取り入れた看護の態度がある（β＝.207, p＝.002）に関連がみられ、調整済みR^2値は.340であった。

第3因子は、排泄ケアチームがある（β＝.176, p＜.001)、看護師経験年数が長い（β＝.119, p＝.011)、コントロール感得点が高い(β＝.166, p＝.013)、学習雰囲気得点が高い(β＝.162, p＝.009)、生活の視点を取り入れた看護態度がある（β＝.137, p＝.038)、排便ケアに関する知識得点が高い（β＝.097, p＝.038）に関連がみられ、調整済みR^2値は.384であった。

第4因子は、皮膚排泄ケア看護認定看護師がいる（β＝.277, p＜.001）に関連がみられ、調整済みR^2値は.277であった。

【考察】

重度要介護高齢者に対する快適な排便ケア実践に対し、勉強会への参加や排便ケアの知識など、知識の獲得することに関連する項目、助言者の存在に関する項目、職場の課題に解決に向けてのコントロール感、生活の視点を取り入れた看護態度は、それぞれ4因子中3因子に関連していた。このことから、介護医療院における重度要介護高齢者の快適な排便ケアの実践に向けて取り組むべき課題として、①積極的な勉強会への参加を促し、排便ケアに関する知識を持つこと、②皮膚排泄ケア認定看護師や助言者となり得る排便ケアのリーダーを育成すること、③カンファレンスを通して排便ケアの課題を解決できるというコントロール感を育てること、④生活の視点を取り入れた看護の態度養うことの4点が示唆された。

【結論】

重度要介護高齢者の快適な排便ケアの実践の構成要素のうち最も実践の認識が高いものが、苦痛と羞恥心に配慮したケアであった。介護医療院における重度要介護高齢者に対する看護師の快適な排便ケアは、【疾患や内服薬の副作用にともなう排便の不快を考慮するケア】【日常生活上のもてる力を活かすケア】【便の生成や移送を援助するケア】【腸内環境を整えるケア】の4因子が抽出された。重度要介護高齢者に対する快適な排便ケアの実践に影響していた主な要因は、勉強会への参加や排便ケアの知識、助言者の存在、課題解決へのコントロール感、生活の視点を取り入れた看護であった。